

被災から3年目を迎えて

被災地の生協から全国の皆さんへ

インタビュー
いわて生協専務理事 菊地靖さん
聞き手・おおさかパルコープ 原田待子さん

岩手県への応援活動を行なう全国の生協の仲間を代表して、おおさかパルコープ組合員理事の原田さんに、「被災地の現状」「復興に必要とされていること」をいわて生協の菊地専務理事に聞いていただきました。

——今までに2回、沿岸部の被災地を訪問しましたが、一昨年と昨年とでは、ほとんど様子が変わっていないというのが率直な印象です。

はい。復興とは程遠い状態です。地震による建物の倒壊だけなら建て替えば何とかなる場合もありますが、津波で住居や工場が失われた所は再建が困難なのです。これまでの災害とは全く違うと痛感しております。

——組合員さんたちとよく話すのは、「大きなことはできないけど、ずっとずっと支援したい。現地に行けなくても、できることはないやろか」ということです。少しずつでも継続して募金をする組合員さんもたくさんいます。

募金や行政のサービスが少なくなってきたので、ありがたいですね。被災地では「このまま忘れられてしまふのだから」という不安のほうが強くなっており、これからはますます心の支援が大事になると思います。つらい人に寄り添い、交流の場をつ

くるための「ふれあいサロン」(お茶会)は、お茶とお菓子を全国の生協から送っていただき、好評です。

被災地で「生協祭り」などの催しを行なった際、おおさかパルコープさんが、たこ焼きを焼いてくださったときは行列ができましたね。

——見ていた方たちも「やってみよう」となって、盛り上がりました。70歳近い人たちも参加していますが、むしろ私よりもお元気で(笑)。お年寄りの知恵を発揮できる場所も必要ですね。

そうですね。閉じこもりがちなお年寄りや独り暮らしの男性などが家の外に出て行くきっかけづくりができればと思っています。特に男性は、特技や仕事の技を生かしてサロンに参加してもらえないかと思っていますが、まだまだ試行錯誤の段階ですね。

——今後についてはどのようなことをお考えですか？

課題はさまざまですが、コミュニケーション再生のための支援も重要です。コミュニティをつくるのは地域の方々ですが、そのお手伝いができればと思っています。例えば夏祭りなどの伝統行事の復活は、ぜひ全国の生協にご

協力いただきながら、地域のために貢献したいですね。

そして、もう一つは買い支えです。これもぜひ全国の生協にご協力をお願いしたいです。営業を再開するメーカーも少しずつ出てきましたが、以前の取引先がまた契約をしてくれるかどうかは難しいのです。せつかく復活したメーカーが製造を続けられるよう、生協も応援していきたいと思っています。

大事なことは、被災地を震災前よりもいい町にするために、生協も地域の方々のお手伝いをしていくことだと思います。

——できる限りご協力したいと思いますので、よろしく願います。

ありがとうございます。これからもお力添えをお願いいたします。

取材日：2013年2月1日

(文 荒川和巳)

おおさかパルコープDATA

本部所在地：
大阪市都島区東野田町1-5-26
組合員数：35万7,782人
※データは、2011年3月20日現在。

同生協では、大阪よどがわ市民生協、ならこープと共同し、ボランティアアパスを運行するなど、復興に向けた活動を行なっている。

ニュース
「交流の場」に、
さいたまコープも協力

2月16日に、コープふくしま主催の「交流の場」が、福島市のさくら仮設住宅で行なわれ、さいたまコープ（現・コープみらい）も運営に協力しました。参加者は、スタッフを含め16人でした。

さくら仮設住宅では、双葉町から避難した住民48人が暮らしています。さいたまコープは、旧騎西高校（埼玉県加須市）で避難生活を送る双葉町住民への支援活動を継続的に行なっており、双葉町の依頼を受けて、福島県の仮設住宅で生活している住民への支援として「交流の場」の開催に協力しています。



ゲームで盛り上がる参加者。

16日は、コープふくしまの組合員ボランティアが講師となり、フラダンスを踊りました。音楽がかかると、参加者は自然に手足を動かし、皆さん笑顔で楽しんでいました。

コープふくしま地域理事の斎藤恵理子さんは、「さくら仮設住宅には初めて来ましたが、やはり、仮設住宅ごとに雰囲気の違いですね。こちらの皆さんは、元気でですね」と話します。しかし、笑っていられるのは、みんなと一緒に過ごすこの場だけ、と話す参加者も。「だからこそ、こういった『交流の場』づくりに力を入れていきたい」と、さいたまコープ・参加とネットワーク推進室地域ネットワーク部の福岡和敏さん。震災から3年目を迎え、「心の支援」がますます必要となっています。



音楽にあわせてステップ。

ニュース
使用できなかった
下水道料金を還付へ
みやぎ生協



9月～10月にかけて行なわれた「被災者懇談会」の様子。

みやぎ生協は、「被災者懇談会」を一昨年から年に1回開催し、要望を取りまとめ行政などに提出しています。例えば、仙台市では上下水道の使用料金を一括請求しており、被災により下水が使用できなかった世帯で過払いが生じたケースがあります。1月9日にみやぎ生協が市に提出した要請書に盛り込んだ、この下水道料金問題について、今後は請求があれば還付されることになりました。みやぎ生協は「今後も皆さんのくらしの再建を応援したい」としています。

ニュース
組合員が
振り付けで応援
コープあいち

岩手県大船渡市の仮設住宅で暮らす85歳の女性が、自身のボランティア活動をもとに作詞し、東京のジャズピアニストが作曲を担当した応援歌『がんばるぞ大船渡』。コープあいち主催の被災地復興応援ツアーで訪れた大船渡のジャズカフェで、この歌を聴いた組合員が「二人暮らしのおばあさんに笑顔になつてもらいたい!」と、振り付けを考えました。ほのぼのとした振り付けの動画がインターネットで公開されています。

※「コープあいち 復興ムービーチャンネル」でインターネット検索を。



作詞をした女性とはやり取りが続いており、正月にはコープあいち組合員の元に手紙が届いた。



JCNが12年12月11日に広島で開催した「広域避難者支援ミーティング in 中国」の様子
(写真提供 JCN)。

リサーチ「被災地のいま」

「広域避難者」

発災から3年目に入った現在も、約7万人もの方々が県外へ避難されています。そのほとんどの方は生活再建のめどが立っておらず、友人や知人の少ない土地に暮らすことでの孤立化などが問題となっています。生協ではこれらの人びとに、さまざまな支援活動を展開しています。

広域避難者の現状

復興庁によると、2013年2月7日現在、自宅を離れて避難している方は約32万人。そのうちの「県外避難者」は福島県5万7、135人、宮城県8、079人、岩手県1、627人の上っています。また、この三県以外にも福島県に近い栃木県や茨城県などから自主的に避難されている方も少なくありません。例えば静岡県の公式サイトによると、13年2月4日現在で(静岡)県内に茨城県から49人、栃木県から6人、千葉県から18人の方が避難されています。

静岡県では災害救助法に基づき、自主避難者も含めて県内への避難者に公営住宅の2年間無償提供などの支援をしています。広域避難にはさまざまな問題があります。特に小さなお子さんを連れて避難してきたお母さんは「知り合いが少なく、3歳の娘と24時間過ごしている」「住民票はそのままで行政のサービスの情報を集めにくい」などの不安を挙げています。また、各種ボランティア団体の活動も、個人情報保護の壁により、避難者の実態の把握が難しく、支援しなくても活動が制限されがちであることも指摘されています。

こうした事態を受け、被災者・避難者への支援活動に携わる東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN: Japan Civil Network)では、「広域避難者支援ミーティング」を各地で開催、参加団体間で情報を共有して問題解決に取り組んでいます。このネットワークは、日本生協連および全国の生協を含めた企業やボランティア団体など約800団体が参加し、各種の被災者・被災地支援のために連携しているものです。

生協の取り組み

生協でもさまざまな取り組みを継続中です。

例えば避難者が多い山形県では、生協共立社などが中心となって避難者支援の催しを開催し、名物の寒ダラ汁の炊き出しやスキー教室などを行っています。

さいたま市では福島県双葉町の方が現在も暮らす旧騎西高校(埼玉県加須市)での炊き出しなどを実施しています。

また、コープみえでは三重県内に避難されている方々の家事、託児などの



2月10日、11日に行なわれた生協共立社主催の「親子でスキーを楽しむ会」。山形県内に避難している6家族11人が参加した。

手伝いも行なっています。

愛知県では、県が発足させた「愛知県被災者支援センター」にコープあいちも運営協力団体として参加しており、センターを通じて県内に住む広域避難者の情報を把握するようにしています。交流会「いっしょにやりますの集い」も定期的に開催し、同じ地域在住の方同士で開催するなど工夫が凝らされています。

こうした避難者がほっとできる居場所づくりが全国の生協で取り組まれています。

(文 荒川和巳)